

2019年9月28日

加藤周一文庫公開講読会

[1] 開催目的

- (1) 加藤周一文庫の活用
- (2) 加藤周一現代思想研究センターの社会的発信
- (3) 加藤周一に対する理解を深めること
- (4) 「精読」の実践

[2] 運営体制

- (1) 主催：加藤周一現代思想研究センター＋立命館大学図書館＋立命館大学リサーチオフィス
- (2) 講師：加藤周一現代思想研究センター員

[3] 購読方法

- (1) 加藤周一著『羊の歌』を教材として使用、各自持参のこと
- (2) 参考図書：鷲巣力著『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（岩波書店、2018）
- (3) 各講師が各一章ずつ担当する
- (4) 毎月一回の講読会を開く。原則は一回につき一章
- (5) 毎回13:00—15:00、最大16:45まで延長の可能性あり
- (6) 今後の予定
2019年10月19日（講師＝猪原透）
2019年11月16日（講師＝福井優）、
2019年12月14日（講師＝西澤忠志）、
2020年1月18日（講師＝半田侑子）
2020年2月15日（講師未定）
2020年3月7日（講師未定）

書物を読むことの意味

(1) 経験の拡充

人生は時間を経験に置き換える作業である
経験には直接的経験と間接的経験とがあり
直接的経験は数が少なく
間接的経験は無限の質と量がある
間接的経験を獲得する有力な方法は書物を読むこと

(2) 自由になること

なぜ「経験を拡充する」必要があるのか
人はさまざまな条件を負って生きている
自由に生きるには自らに課せられている条件を知ること
さまざまな条件を客観的・一時的・空間的制約を超えて———知ること

(3) 他者を知ること

書物は他人によって書かれる
自分ではない、他人を知ること

「精読」することの必要性

(1) 書物の読み方

速読、精読、濫読、積読……

(2) 精読する

時代の流行に合わないが
一言一句確認しながら読む
一言一句正確に読む
一言一句敷衍して読む

速読では気づかない「発見」がある